

Title	J・モリニ工著 坂本慶一訳 フランス経済理論の発展
Sub Title	
Author	松浦, 保
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.1 (1963. 1) ,p.86(86)- 88(88)
JaLC DOI	10.14991/001.19630101-0087
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630101-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

たため、成功は覚束なかつた。事実土地を中途で放棄する場合が多かつた。こうしたなかで限られた土地への依存度は高まつていつた。村落を共同体として組織化することはこの段階で考へ出された土地利用のもつとも合理的な方法であつたのである。土地を合理的に利

面を持つにいたった。著者は村落共同体の形成と共に登場した領主を、バン領主権の集積者とみるが、むしろ彼は一円的支配者として何よりも軍団の主宰者ではなかつたか。

著者は村落が共同体として組織されることを集村化現象と呼ぶ。私はそれが小領主にかかる大領主の登場を必然化したと考える。著

者はこの時点での封建支配の成立を見る。しかし私は転換期として理解する。従つて著者のいうように、「封建支配の成立と村落共同体」ではない。むしろ逆に、「村落共同体の成立

と封建支配」という視点がこの時期の問題把握のためには適切と思うがどういうものであろうか。(未来社・一九六二年一月刊・A5)

一渡辺國廣一

遇を受けたかであつた。彼はその支配下にある農民を大領主に奪われ、今やその経済的基盤をうしなってしまった。彼は大領主の家臣となることをよがなくされた。家臣となつた時、彼は従来から彼が持っていた領地の一部をヒーフとして保持することを認められた。そのことにより彼は大領主に対し軍事力の提供者として隸属者と化した。同時に大領主は王から裁判権を引受け、裁判領主としての側

『フランス怪奇理論の発展

「社会会計」および「国民所得」という概念を分析用具として、経済現象の分析が始まつたのは、またその有用性が、人々の間に自覚され、高く評価され始めたのは、極く最近のことである。

- 著者が解決しようと熱中した問題。

3) これら諸問題に対する著者の立場。

これである。

ボワギュベール——彼は教科用の概説書が
わざか数行しかあてない、忘れられた著者で
あつた——を、モリニエは、ケネー以前に出
た偉大な経済学者と評価し、彼の功績は福祉

われわれは個人所得の総計から非人格的な「純生物」へと招じ入れた。第二の変化はわれわれを個人所得のたんなる総計へとつれもどした」と。しかも、この二つの変化は、それぞれ、社会経済的事実の発展に対応したものと考えてよいのではなかろうかとモリニエは補足している。

ケネーは総所得を個人所得に還元することなく、生産の場で把握しようとした。彼は、國家を、地主階級によつて指導された一つの広大な農企業と同一視し、そして国民所得をこの企業の「純生産物」と考えた。このようないくつかの論理は、分配面のみを分析して、国民所得理論は、分配面のみを分析して、国民所得を個人の所得の総計とみなしたボワギュベールの理論からはつきりと区別されるであろう。

セーの時代は、ブルジョアジーの勝利が確定した時代であり、土地所有者の経済学の地位を企業者の経済学が奪取することを宣言し

た時代であつた。

ギュベールの国民所得は個人所得の合計であるという議論を生かし、この議論から「生産不生産論争」へと導いた。そして、ボワギュペールにあって、しかもケネーで一旦ひつこめられた理論が、むしろここではセーの議論の特徴となるのである。

る。すなわち、「このようにして、J—B・セーとボワギュベールとをへだてる一世紀のあいだに、国民所得の概念は、結局、相反する二つの変化をこうむつた。第一の変化はわ

原著名

«Les métamorphoses d'une théorie économique, Le revenu national chez Boisguilbert, Quesnay et J.-B. Say»

ジヤン・ゴットマン著

『メガロポリス』

Jean Gottmann: *Megalopolis, The Urbanized Northeastern Seaboard of the United States.*

J・ゴットマンの多年にわたり取組んでいた合衆国大西洋岸都市化地域の研究が「メガロポリス」と題されて上梓されたということを知ったのは、今年の五月、シカゴ大学のフランケル博士のアフリカの開発問題を扱つた小論によつてであった。その後一ヶ月足らずして本書を入手することができ、今夏は楽しいうよりは、書評の対象となるべきものかも知れない。

さて、表題のメガロポリスであるが、その字義は、私見では三つ、即ち、その一是固有名詞でプロボネサスに建設計画されていたというギリシャ最大の都市名（現在でも地名として残っている）、その二は、おそらくこれに由来すると思われる普通名詞、巨大都市も他ならない。

要するに、本書は現代都市に関する極めてマルティ・ラテラルな研究書であり、単に都市の研究者のみでなく、専門外の研究者、一般の読者にも興味あるものであり、種々な思考の素材を提供するに十分であろう。
(The Plimpton Press, Norwood, Massachusetts, pp. 810, \$10.00) —高橋潤二郎—

福地崇生著

『計量経済学入門』

計量経済学について、「私の経験から、通読できるやさしい入門書を作ろうとしたのがこの本で、主題の並べ方・叙述のしかたは多くあります」というところに端的にあらわれている。第一編模型・構造論、第二編推定論、第三編応用論を通じて、この立場が貫

しくは超大都市、そして、その三是P・グッデス、L・マンフォード等によつて用いられた一九世紀末から今世紀にかけての鉄と煉瓦、煤煙と騒音に象徴される收拾のつかなくなつた産業都市群の呼称であるが、本書がいふまえて、合衆国の北東岸——南北はニューハンブシャー南部からヴァージニア北部まで、東西は大西洋岸からアパラチア山麓まで——都市と郊外が殆んど連接的に拡がつてゐる地域を指しており、より一般的には、大規模な conurbation と同義であると考えてよからう。

その構成は、

The Dynamics of Urbanization

The Revolution in Land Use

Earning & Living Intensely

Neighbors in Megalopolis

と題せられる四部、一四章とから成つており、全文約八〇〇頁に余る大著であるから、もとより、ここでその内容を紹介することは至難であるが、おそらく本書には次の三つの性格づけができるなどを指摘することは有益だろう。即ち、その第一は本書を都市化——その原因・過程・帰結——に関する理論的検討とその現状把握に関する方法的吟味としてみるとことであり、第二はそれを純粹に地理学的な

かれている。著者の言葉を借りれば、「これはおそらく未熟にして入門書を書くことの特権と限界でしょう。」むろん、「未熟」と云うのは謙遜であつて、「大規模な連立方程式による実証研究」と「総合的な分析・予測・計画」問題について、おそらくこの著者ほどの豊かな経験をもつものは現在他にはそう多くはないから、「私の経験」による「特権」の活用は読者にとっても、貴重なものであることは疑いがない。たとえば、第一編における認定問題、認定条件に関する叙述は委細を尽し、確かな体験の裏打ちをもつてゐる。また第三編における日本経済の計量模型の展望は、模型の操作性という観点をふまえたうえで、適確な評価を各モデルに与えている。それにもかかわらず、やはりわれわれは「最小二乗法を使つような小規模な研究も一応（計量経済学に）包括されますが」という立場に、とにかくわからない。第二編において吟味される最尤法をえない。他の諸推定方法は、「小規模な実証研究」においても利用可能なのであり、また現実的な応用目的と比較・考量するとき、最小二乗法による「大規模な実証研究」もまたその存在理由を持ちうるからである。もとより、著者がその「経験」から、こうした可能性と有

業績、合衆国北東部大西洋岸の地誌、そして、第三はメガロポリスの形成とそこにおける人間生活の変貌を描写することによって現代に対する社会ないし文明批評を試みたものとしてみるとことである。

このいづれの立場から本書を評価するかは、読者の自由であるが、矢張り著者ゴットマンの意図したところは第一の都市化研究にあつたとすることは妥当であろう。この意味で、本書は最近だされたL・P・グリーンの「プロヴィンシャル・メトロポリス」と比較検討されるべき存在といえよう。これに対しても、地誌としてみるとことは著者自身序文の中で本研究が「一地域とその住民のポートレイト」を意図するものではなく、かつ、その内容も「記述とは呼び難い」と述べ、これを否定しているが、本書の大半はこのメガロポリスと称せられる地域の個性を記述するため費されているのであって、むしろ、これは、著者が「單なる記述」とは呼び難いと書きかたたことだと受け取るべきかも知れない。又、本書の第一章が「時代メテイウス」、結論に代る第一五章が「時代の新秩序」という表題を冠せられていることからもその一端をうかがわれる様に、本書は単なるメガロポリスの分析のみでなく、それを生みだした現代社会ないし文明に対する